

松下幸之助記念志財団 研究助成

研究報告

(MS Word)

【氏名】

井上拓也

【所属】(助成決定時)

京都工芸繊維大学

【研究題目】

アイヌ語地名の実用的な意味の研究—生態学的意味論の観点から

【研究の目的】(400字程度)

本研究の目的は、アイヌ語地名を形態論的に分析し、地域に密接した文化的・生態学的な意味を明らかにすることで、アイヌ民族の文化的遺産と自然環境に関する知見を提供することである。アイヌ語地名には、地理的特徴だけでなく動植物や土地利用に関する実用的な意味が含まれていることが多く、地名研究を通じて、アイヌ民族が特定の土地に対して持つ知識や価値観、生活習慣が表れる。このため、アイヌ語地名を理解することは、その文化と生態系との関係を読み解くことに等しい。また、本研究はアイヌ民族が有する権利を再評価するきっかけとなり、日本社会がその権利をどのように法的に認識すべきかを考察する手がかりともなり得る。この分析を通じ、現代社会がアイヌ民族の遺産と法的地位を再認識することを目指している。

【研究の内容・方法】(800字程度)

本研究では、アイヌ語地名の修飾部、特に動詞や形容詞に焦点を当てて、地名の持つ生態学的意味を分析する。アイヌ語地名に含まれるこれらの修飾部は、その土地の地理的特性や自然資源の利用に密接に関連しており、地域社会にとっての実用的な意味(アフォーダンス)を示している。たとえば、「ポンベツ(小さい川)」と名付けられた本別町の「ポン(小さい)」は鮭の遡上など(漁猟)に関連する実用的意味を、また「ポロベツ(大きい川)」と名付けられた幌別町の「ポロ(大きい)」は(交通)の手段としての重要性を示していると考えられる。このように、アイヌ語地名には地域社会の営みと環境に対する価値観が表現されており、地名を研究することで土地利用や生態学的意義の理解が深まる。方法としては、まず、知里真志保の辞典などを参考にして地名の形態論的データベースを構築し、各地名の修飾部が示す意味を整理した。次に、オンラインマップにこれらのデータをプロットすることで、地名と環境要素の関係が視覚的に確認できるようにした。これによりアイヌ語地名と自然環境との対応関係を検討することで、地理的条件や文化的背景を視覚化し、他の研究者や教育機関と共有することで、多様な視点からの考察と地域資源の理解を促進するための基盤とした。また、実地調査の代替として、アイヌ語地名研究の第一人者である山田秀三が行った実地調査の音声資料を北海道博物館で閲覧した。これにより現在では聞き取り困難となったアイヌ語地名と土地利用に関する知識や当時の地名認識に関するデータ等を収集・分析した。さらに、研究過程で蓄積したデータをもとに言語と生態学的要素の関連を生態学的意味論の視点から分析し、アイヌ語地名が持つ地域社会における実用的な意義をデータベースに併記した。

【結論・考察】(400字程度)

本研究の過程で、アイヌ語地名の形態論的分析には統一的なフォーマットが必要であることが判明し、これによって分析者の主観や知識に依らず、客観的に地名の意味を解釈できる手法が構築された。また、このフォーマットを利用することで、従来解釈が不明確だった地名についても、ある程度の意味や背景を予測する可能性が見えてきた。さらに、地名をマップ上にプロットした結果、川筋に沿って自然資源に関連する情報が分布していることが確認され、これは川筋や流域の利用権が地名に反映されていることを示唆する。これらの発見は、アイヌ語地名が文化的・生態学的な意義を担い、地域資源の分布や土地利用のルールを反映している証左といえる。今後は、このデータベースを他の研究者と共有し、さらに精緻な分析や解釈を深めていきたいと考える。